佳作

僕の友達

埼玉県伊奈町立小針小学校五年 石川 和明

六月のある日、母がホームセンターで買ってきた水鉢のスイレンの中に、何やらちよろちよろ泳いでいる物を見つけた。中をのぞき込むと、丸い頭で細長い尻尾の生物が見えた。水面上がってきそうになるけれど、すぐスイレンの陰に隠れてしまった。たまらず網で一匹だけすくってみると、それは「オタマジャクシ」だった。ピンクのほつぺたで口をパクパクさせて「かわいいな」と思った。数えたら全部で十二匹いた。

オタマジャクシを飼うのは初めてで、パソコンで飼育方法を調べた。流水や石と水、新しいすみかに慣れるようにスイレン鉢ごと大きい飼育ケースに入れた。僕がお世話係になった。

オタマジャクシは、しばらく人見知りだった。スイレンの葉の上に餌を置いてみてもすぐには食べに来ず、

僕がいなくなつてから食べに来ているようだった。二週間経つと僕が餌やりに行くと口をパクパクしながら浮上してくるようになった。ちょっとした顔見知りになった。今まで飼ったメダカやカブトムシとはかなり違う。行動は慎重で、世話をすればもっと仲良くなれる知能の高い生き物だと感じた。

七月、オタマジャクシに小さな足が生えてきた。力強くぐんぐん進む泳ぎ方になった。成長が嬉しい反面、カエルになったときのことを想像して悩んだ。「カエルがたくさん鳴いているあの田んぼに放したほうがいいのかな」。自転車で行ってみた。僕のオタマジャクシは田んぼのより小さい。自然に放したらきつと鳥や蛇、大きいカエルに食べられてしまふだろう。カエルが飼育ケースの中で死ぬのを見たくないけれど最後まで飼うことに決めた。

八月の朝、連日次々にカエルの姿に成った。しかも十二匹全部。スイレンの影に全員が隠れてしまうほど小さかった姿を思い出し、僕は嬉しくてカエルと一緒に飛び跳ねた。カエル達は外の世界に行きたそうにケースの中で飛び跳ねているけれど「ごめんね、外に出せないんだ」と心の中で少し謝った。

今も飼育ケースの中で自由に飛び跳ねたり泳いだ

りしている。夜、涼しくなると鳴いている。死んでしまったカエルは、「今までありがとう」と言つて庭の土に返している。

広い田んぼに放したほうが一時的にはカエル達は喜ぶし、僕の手間も無くなるけれど、生態系や捕食者のことを考えるとむやみに自然に放すことはできない。心の中で自分に言い聞かせている。生き物を「責任をもって飼う」ということは、可愛がったり成長を喜ぶだけではない。飼育方法に悩んだり、汚物を掃除をしたり、死骸は悲しい気持ちをこらえてきれいに土に埋めている。